

管 理

夏の家畜衛生

県畜産課 藤原技師

本年は例年になく長雨に見舞われ、農作物は大きな被害を受けておりますが、家畜も直接間接にかなりの影響を受け、体も相当衰弱して来ております。梅雨明けとともに本格的な夏がやって来ますが衰弱に続く暑さは家畜にとって非常に影響が大きく、特に暑さに弱い乳牛や鶏は吸血昆虫の襲来等も手伝って、乳量の減少、産卵の低下に引継ぎ、全身的な栄養の障害を引き起し経済的にも大きい損失を招きます。また体の衰弱はいろいろな病原体の侵入を助け、また、飼料等も変敗し易いため家畜の健康管理上一番問題の多い季節です。つぎに夏の家畜衛生上注意すべき点、かかりやすい病気のいくつかの対策等について述べてみたいと思います。

1、飼養管理上の注意事項

何れの季節でも家畜の食欲の良否が泌乳産卵等と深い関係がありますが、夏場は暑さが厳しいため自然と飲水量が増し、これに反して飼料の摂取量が減って泌乳量、産卵の減少を招きます。この対策は食欲の増進による栄養の維持で、比較的気温の低い時間に採食出来るよう飼料の給与時間を早め、飼料は出来るだけ良質のもので消化し易いものを選ぶことが必要です。また飼料は醗酵し易くよく変敗しますから給与飼料はよく吟味し、また残食したものは取り捨てるようにし飼槽も出来るだけ手まめに掃除するよう心掛けることが大切です。飲水は井戸水等の新鮮で冷たいものを利用することも必要です。鶏では夏場によく緑餌が不足し勝ちですが高温はビタミンAの消失を助けますから十分緑餌を給与しビタミンAの補給につとめたいものです。

2、昆虫類、寄生虫対策

夏場になりますと蚊、蠅、ブユ、アブ、シラミ、ダニ、ヌカカ等の昆虫が非常に多く直接間接に種々の被害を与えます。特に安眠の妨害、吸血、更には各種の病原体を媒介し栄養障害を招く原因にもなります。

例えば蚊は流行性腹炎、めん山羊の腰麻痺、牛のわひ等の原因となる糸状虫の幼虫を媒介し、ニワトリ、ヌカカは鶏ロイコチトゾーン病の原虫を、ダニは牛のピロプラズマ病の原虫を媒介します。これ等昆虫類の駆除にはDDT、BHC等の殺虫剤或はひ忌避剤を散布し、溝、下水等の清掃によりその発生の根源を絶つことが必要です。また蛔虫、盲腸虫、条虫、等の内部寄生虫や、ハムシ、シラミ、ワクモ等もよく繁殖しますから定期的な駆除を実施したいものです。

次に夏の伝染病予防対策を考えてみますと、夏は各種伝染病の多発する時期ですが、特に最近のように家畜が多頭数、或は集団化して参りますと一旦伝染病が侵入すると、従来以上に大きな被害を受けることは容易に想像できますが、これら伝染病を未然に防止するための各種予防注射等は積極的に受けられる事は勿論、畜舎等の定期的消毒の励行、畜舎入口への消毒盤の設置、手洗への消毒薬の設置等を考慮し、外来者の出入を禁ずる等万全の予防措置を講じることが必要です。

3、夏に多発する疾病の対策

(1) 2等乳

1等乳は70%アルコールに凝固するものの総称で、この中には酸高乳、低酸度2等乳、異常乳の3つがありますが、酸高乳、異常乳は特に夏場に多発します。酸高乳は搾乳後の牛乳の取扱いが悪く、細菌が繁殖して牛乳中の乳酸が増えるために起るもので、搾乳器具の消毒、清掃、乳房、牛体を常に清潔に保つことが必要です。また搾乳後の乳は出来るだけ速く冷し或は出荷を早めにする必要があります。異常乳は殆んどのが乳房炎に罹った乳房より分泌されるもので、夏場は乳房炎が多発するため、予防措置を必要とします。まず牛体は常に清潔に保ち、搾乳後は乳房の按摩清拭を充分にし、搾乳時間が余りずれないよう注意します。不幸にして乳房炎になっ

岡山畜産便り 1963.07

た場合は素人治療法でなく獣医師の診断を受け、中途半端な治療でなく完全に根治してもらうことが大切です。

(2) 牛の流行性感冒予防接種

本年も昨年に引き続き各家畜保健衛生所で実施しますから進んで予防接種を受けて下さい。

(3) 豚コレラ予防接種

岡山県では過去3ヵ年連続発生し、本年に入ってから2月以降毎月発生と云う状況ですが幸にして、かなり予防注射が進んでおり余りまん延はして居りませんが、今迄発生したものの総てが予防注射を受けておりません。従来からの豚コレラの発生は5年毎に大きな波がありますが、本年が丁度5年目に当り農林省でも充分注意するよう指示していますので、離乳後7日から10日位で注射を受け、また導入した子豚も必らず補強注射を受けるようにし、全頭予防注射により完全にコレラを撲滅するよう御強力をお願いします。

(4) 豚丹毒

昨年は全国的に豚丹毒が発生し、本県においても予想以上の発生があり思わぬ被害を受けております。豚丹毒菌は人にも感染しますから充分注意をする必要があります。予防対策としては、畜舎を清潔に保つのは勿論ですが、魚の生あら、川の藻等の給与は発生を助けますし、豚舎がむれて豚が衰弱しますと多発しますから、環境の整備に特に気を配り、飼料は配合飼料以外は必らず煮沸して与えることが必要です。

(5) 鶏のロイコチドゾーン病

本病の被害は年々増加の傾向にありますが、特に秋びなは、早春びなが被害が大きく、ひなは喀血したり、非常にきれいな緑便をして死ぬことがあります。産卵鶏は産卵が急に減り、貧血とともに緑便をし、遂には換羽することがあります。本病の原虫を媒介するニワトリヌカカを殺す事が考えられますが、非常に困難なため最近では飼料中に薬品を混入して予防することが考えられています。

(6) 農薬の被害防止

例年農薬の被害は新聞の社会欄等に取りあげられますが、農薬使用時期の家畜の管理にも意を注ぐ必要があります。

以上述べましたものは極一部の疾病についてのみですが、家畜の異常を認めたときは、役場の係の方や、農協、開業獣医師、畜連家畜保健衛生所等に速めに連絡され、大事に到らない中に被害を最少限に喰い止めるようお願いいたします。